

## 渋沢栄一と妻・千代子所用の服飾資料 ―歴史資料としての服飾―

川井 結花子（共立女子大学博物館学芸員）

### 1. はじめに

渋沢栄一（1840～1931）は、「日本近代経済（資本主義）の父」と称され、我が国の資本主義経済の発展のほか、医療福祉や教育事業などに多大な功績を残した人物である。昨今では、大河ドラマの主人公として描かれ、2024年から発行される我が国の新一万円札の肖像になることが決定するなど、話題がつかない人物である。

共立女子大学博物館（以降当館）では、渋沢栄一と妻千代子夫人が所用したと伝わる服飾資料を所蔵している。これらは、昭和60年（1985年）に古美術商を介しまとめて購入され、これまで未公開のまま本学で保管されてきた。本稿では、これら渋沢に係る服飾資料を紹介し、その諸相をみていく。

### 2. 渋沢栄一について

渋沢栄一がどのような生涯をたどってきたかを見ていく。天保11年（1840年）武蔵国榛沢郡血洗島村（現在の埼玉県深谷市血洗島）の農家に生まれた。渋沢家は、農業の傍ら藍玉の製造と販売に加え、養蚕を生業としていた。栄一は、父・市郎衛門とともに藍玉の販売にかかわり、信州や上州の農家を渡り歩いて商いを覚えていった。また、従兄の尾高惇忠<sup>1</sup>から漢籍や論語の手ほどきを受け、惇忠の弟で従兄の尾高長七郎や渋沢喜作らとともに剣術を学ぶなど、当時の一般的な農家としては、豊かな生活をしていただと考えられる。安政5年（1859年）には、尾高惇忠の妹の千代子と結婚する。

文久元年（1861年）に遊学のため江戸へ向かう。当時は尊王攘夷運動の真ただ中であつたため、栄一もこれに影響され、高崎城の焼き討ち計画を尾高惇忠や渋沢喜作らと計画するが、先んじて江戸へ出ていた尾高長七郎に、計画は無謀であることを諭され、計画を中止する。計画は実行に至らなかったが、幕府による過激な尊王攘夷活動の取締が厳しくなっており、渋沢たちの企てもどのような形で露見するか分からない状況であつた。そのため、自分たちや家族に害が及ばないよう、その後も志士としての活動を継続していくためにも、お伊勢参りを口実に渋沢喜作と血洗島村を出て京都へ向かった。

その道中、江戸遊学の際に知りあつた一橋家家臣の平岡円四郎の名前を利用して京都まで向かうことを思いつき、平岡に会うため江戸に立ち寄った。ところが、平岡は徳川慶喜に随行し京都にいたため会うことはできなかった。しかし幸運なことに、平岡の家臣は、「渋沢という者が来て家臣にしてほしいと頼んでくるかもしれない。その時はよくしてやり、京都にいる私を訪ねるように。」と、平岡から伝えられていたため、二人は無事京都へ向かうことができた。その後、渋沢栄一と渋沢喜作は、平岡円四郎の家来として正式に一橋家に仕官することとなった<sup>2</sup>。仕官後は、平岡の命に応え、密偵や一橋家の財政状況を整えるなど多方面で活躍した。

主君の慶喜が15代将軍となると、栄一も幕臣として仕える。慶応3年（1867年）にパリで開催された万国博覧会に将軍の名代として出席する徳川昭武の随員として、栄一も渡仏し、万博視察の傍ら西洋の産業や政治を学んだ。万博視察の後各国を訪問する予定であつたが、大政奉還に伴い帰国の命令が下され、慶応4年（1868年）11月3日に横浜へ帰国した。

帰国後は、静岡藩に商法会所を設立し、フランスで学んだ株式会社制度を取り入れ、藩の財政立て直しに貢献した。その後、大蔵省改正掛に仕官し、国家財政の立て直しおよび郵便制度の立案にかかわるなど、近代日本の基礎を築く事業を成していく。

明治6年（1873）には官職を辞し、日本初の近代的銀行である第一国立銀行を設立し、総監役を経て頭取に就任した。以後、第一国立銀行を拠点に、東京株式取引所（現在の東京証券取引所）や東京商法会議所（現在の東京商工会議所）の設立など、日本経済の基盤を築いた。また、鉄道等の運輸業・都市開発・製造業・福祉・医療・教育など幅広い事業に携わり、現代においても渋沢関わった多くの企業や団体が、私たちの生活を支えているといっても過言ではないだろう。

ちなみに、本学の前身校である共立女子職業学校の設立に際して、渋沢から出資金があつたことが、『渋沢栄一伝記資料』第26巻に記載されている<sup>3</sup>。渋沢が出資をした具体的な理由は定かではない。ただし、鹿島茂によると、渋沢が共立女子職業学校の設立に出資に関与したことについては、共立女子職業学校が、多くの人の共同の資本と知識を合わせて設立されたことが、渋沢が理想としていた「合本主義」の思想と共通していたことや、本学設立の発起人である宮川保全や矢野次郎が渋沢自身と類縁があつた<sup>4</sup>ことから、渋沢が職業学校設立に際して財政的援助を行った可能性を示唆している。

経済界を引退した後は、『徳川慶喜公伝』の編纂事業を行った。本書は、渋沢栄一が晩年に企画し、編纂作業すべての指揮をとり、

徳川慶喜本人から直接に証言を得た伝記である。この事業に注力した背景には、慶応4年（1868）におこった鳥羽伏見の戦いにおいて、当時の主君であった徳川慶喜が臣下を大阪城に残して江戸城へ帰還した行動についての渋沢自身のある思いがあった。当時パリに滞在中であった渋沢には、これについての正確な情報がなく、自身の主君がなぜそのような行動をとったのか疑念を持ち続けていた。

明治20年を過ぎた頃、ようやく<sup>5</sup>慶喜から元から戦意は無く、自身が出陣することによって戦いが激化することを回避したかったから、という本心を聞き出せた結果、主君の名誉回復をしたいという思いが強く沸き起こったからである。本書は、慶喜の願いに従い、慶喜が死去した大正2年（1913）から時間をおいた大正7年（1913）に刊行された。

そして渋沢自身は、昭和6年（1931）に93歳で死去する。

### 3. 渋沢栄一所用「毛皮付き外套」(ID1040)について

渋沢栄一が所用したと伝わる毛皮付きの外套である。男性が着用する羽織以外の外套としては、インヴァネスコート<sup>6</sup>を日本風にした二重廻しやトンビなどがある。インヴァネスコートは、1860年ごろからヨーロッパの男性が着用したケーブ付きのコートである。これが、我が国においては、明治元年に輸入<sup>6</sup>され、同20年ごろには、和服を着ていても袖が邪魔にならないようにインヴァネスコートから袖を取り外し、ケーブの部分だけを残したものが、二重廻しやトンビと呼ばれるようになったとされる。しかし、本作にはケーブやマントなどの特徴がみられないことから、極めて珍しい服飾資料といえるだろう。本作の大きな特徴は、コートと羽織を合わせたような特異な形状と、裏地の全面についている毛皮である。

本作には、渋沢栄一がいつ頃これを着用していたかを示す資料が付帯しないため、本作自体から得られる基本的な情報と、前述の渋沢の生涯を参考にしながら、渋沢がこの服を着用していた時期と用途、場面を検討していくこととする。

まず基本的な構造と染色方法等についてみていく。表地は、紬地で仕立てられている。やや紫がかった黒色である。合成染料で染めたはっきりとした色立ちでないことから、天然染料で染められたものと考えられる。仕立ては、和裁技術を駆使して作られているようで、着物のように平たくたためるような構造になっている。（図3）前後の身頃の間には、2枚の三角形の布を1枚に縫い合わせ、それを脇に縫い付けて襷（まち）とし、裾が大きく広がるように仕立てられている。両方の袖付け下に14cm程のポケットのような開口部があり手が差し込めるような状態になっている（図4）。また、両前見頃には胸紐が4本縫い付けられて前を閉じられるようになっている。



図1「毛皮付き外套」



図2 襟を閉じた状態



図3 全体の構造

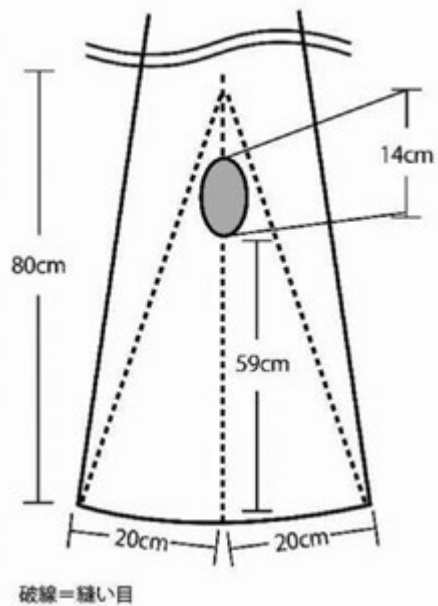


図4 脇下のまちの構造

#### <法量>

##### ○全体（図3）

丈：116.5cm

衿：75.8cm

襟幅：12cm

袖幅：35cm

袖付け下から裾の長さ：80cm

紐：全長 40cm、幅 2.2cm

##### ○袖付け下部分（図4）

空き（ポケット）部分：14cm

空きから裾まで：59cm

裾全長：各 20cm（全長 40cm）

次に裏地について見ていく。裏地には、前後の身頃、袖の先、衿元まで、くまなく白い毛皮が糊で貼り付けられ、それをぐりと囲むように、襟まわり、袖口、裾に3.5cmほどの赤い襦子地で縁取りが施されている。縁取りに使用されている襦子地は、表地とは対照的な鮮明な赤色であることから、合成染料で染められたものと考えられる。この襦子地の縁取りも縫い付けられておらず、糊で貼られている。こうした構造を見たところ、仕立てが和服仕立てに近いことや裏地の毛皮も糊ではりつけられた簡単な構造であることから、外出着というよりも、プライベートな環境で着用されたものであると考えられる。

実際その形状を見ると、襷を付けた胴体部分の仕立ては「道服」と呼ばれる僧侶などの外出着に近く、襟は武家や町人の旅行着である道中合羽に見られる立ち襟に近い。立ち襟はもともと16世紀から17世紀ごろに西洋服の影響を受けて武家の陣羽織や鎧下着に用いられるようになったもので、西洋の衣服においては近代にいたるまで普通に見られるものである。

また袖下に、防寒のために手を突っ込める穴を設けている点も、実用に即して付加されたもので、洋服におけるポケットを模したものと推測できる。渋沢は、着物の他に洋服も日常的に着用していたことから、このような仕立てとなったと考えられる。

我が国においては、獵師などを除いて毛皮を着用することは、明治時代まで一般的なことはなかった。それ以前は、古代に交易品として取引され、中世から近世にかけては、主に武家階級が武具や調度品にこれを用いる程度であった。日本に毛皮文化が定着しなかった背景には、高温多湿な風土や日本人が農耕を主とする民族であったこと、そして仏教信仰による動物の殺生を忌避したためと考えられている。他方、西欧諸国では、日本に比して毛皮を衣服素材に取り入れることは一般的なことであった。

我が国で日常の衣類として毛皮が取り扱われるようになるのは、開国して西洋文化が流入した明治時代以降である。西洋文化が流入し生活スタイルが大きく変化したことにより、毛皮帽やマントなどの毛皮製品を身につけることが流行となり、これがある種

のステータスシンボルとなっていた。また、排仏毀釈に加え、洋食の影響で肉食が始まったことなどにより、人々の殺生観念が変化し、抵抗感が減少したことも影響していると考えられている。

日本では、イノシシ・クマ・キツネ・タヌキ・ウサギ・テンなどの毛皮が利用されたが、明治時代後期には、軍服利用を目的としたウサギなどの毛皮の生産なども開始された。また、毛皮をめぐるのは、明治初期から北海道の沿岸部において、イギリスやアメリカなどの密漁船によるラッコの毛皮の乱獲問題があり、明治29年（1896年）には、渋沢も大倉喜八郎らとともに視察へ出向き、密漁船対策を行っている<sup>7</sup>。

このような時代背景から、本作が制作されたのは少なくとも毛皮着用が表立って許されるようになった明治時代以降であると考えられる。

次に、渋沢栄一の着用していた衣服の移り変わりを、伝記・回想録を追いながら見ていくこととする。まず、本作に該当する文言が記されているかを公益財団法人渋沢栄一記念財団が公開しているデジタル版『渋沢栄一伝記資料』<sup>8</sup>を用いて、「羽織」や「外套」、「毛皮」というキーワードで本作に関連する資料があるかを調べたが、本作を指すと思われる文章は見られなかった。しかし、「羽織」に関する記述の中で、渋沢栄一の衣服に対する考えが読み取れる一文がある。自身による回想録『<sup>あまよがたり</sup>雨夜譚』の慶応2年11月29日の記に、一橋家家臣の原一之進から徳川昭武に随行しパリへ向かうように命じられたのに伴い、出発するまでの準備を回想した一文である。

「しかし独身書生の手軽さといふものは、黒羽二重の小袖羽織と、緞子の義経袴一着と今日見るとドンナ貧乏ナでも穿かない様ナ靴を買つて、それから會て大久保源蔵が横浜で買って來た、ホテル給仕杯が着たと思ふ、燕尾服の古手を一枚、尤も股引もチョッキもないのを譲り受けた、今から思ふと実に可笑しい」

この記述から、黒羽二重の羽織に、仙台平ではなく緞子の袴というありあわせの和服のほかに、つてを頼って洋服をそろえようとしているが、これも股引（パンツ）やチョッキ（ベスト）がついておらず、ジャケットと靴のみという、寄せ集めのものである。渋沢はパリ滞在中には髻を落とし、シルクハットに燕尾服を着用した姿を写真に残すなど、外国の文化に興味を持っていたことは間違いないが、同時に様々なものを形にとらわれず自由に組み合わせ取り入れようとする姿勢が、この一文や本人のたどってきた道筋から感じられる。

渋沢の生涯を振り返ってみると、討幕派から一転して幕臣となり、ヨーロッパ歴訪後、明治政府に仕官したと思えば民間へ戻るなど、多くの転身を繰り返してきた。また、江戸時代末期に実際に外国文化を目にし、帰国後も海外で見聞きたものを積極的に日本へ取り入れている。こうした柔軟な思考は、自身の衣服に対しても同じで、ヨーロッパ歴訪の際に目にした毛皮やコートなどの海外の衣服に影響を受けて、帰国後に和服に西洋衣服の要素を取り入れた本作を作らせた可能性を示唆する。

以上のことから、本作は渋沢栄一が洋行から帰郷した明治時代の極めて初期に、和服に洋服の要素を取り入れてつくられた、プライベートな防寒着であるといえるだろう。

#### 4. 妻・千代子について

つづいて、渋沢栄一の妻である千代子所用の着物について見ていく。

渋沢（尾高）千代子は、天保12年（1841）に、渋沢の故郷と同じ血洗島に生まれた。幼少期から家業の養蚕や機織りを手伝う傍ら、叔父から読み書きや算盤を教えてもらうほか、兄・淳忠から論語や漢学の手ほどきを姉妹とともに受けた。安政5年（1859年）に渋沢栄一と結婚する。この結婚については、栄一の江戸へのあこがれや尊王攘夷思想からいったん遠ざけさせ、家業に専念させるという渋沢の父・市郎衛門の狙いがあったが、栄一本人にはあまり効果はなかった。

結婚をしてからは、栄一が一橋家に仕官したため、共に過ごす時間が少なかったが、栄一がパリから帰国した後は、子どもたちともども暮らした。また、渋沢が設立した養育院においては、子どもたちに裁縫を教えるなど、積極的に渋沢の事業を助けたが、明治14年（1881年）にコレラに罹り、41歳で死去する。



## 5. 千代子所用の着物

千代子所用の着物は2点である。「鼠縮緬地山水風景雀模様着物」(ID:54)(図5)は、縮緬地に描繪を併用した友禅染で模様が表されている。五つ紋には、渋沢家の本家筋の家紋である違い柏の紋がついている。胴裏は薄茶色の平絹で仕立てられている。刺繍などの加飾は無いが、描かれている雀や風景は、繊細な描写が特徴的であり、同模様を表した裏裾(八掛)に至るまで丁寧に仕上げられている。鼠色を地色とし、水辺の風景模様を比較的地味な色で絵画的に表現している点は、明治時代前期の着物に共通して見られる特徴を示しているが、部分的に合成染料による明るい色使いも見られることから、中期に近い千代子の晩年に制作されたものと推測される。

<「鼠縮緬地山水風景雀模様着物」法量>

丈: 151.4cm

衿: 60.8cm

「鼠縮緬地雁行模様着物(襲付)」(ID:1039)(図6・7)は、雁が飛ぶ姿が白抜きの型染で表されている。本作には、紋はついていない。襲には、着物と同じ模様が表されている。礼装として使用された前出作品とは大きく異なる印象を与えるが、江戸時代来の糊防染を用いた型染で白抜きに模様を表していること、地色が江戸時代以来流行している茶色であることなどから、制作年代は前出作品とほぼ同時期あるいは、それよりも若干古い時期と考えられる。

襲を伴う「よそ行き着」であるが使用されている技法は質素なものであり、地味な地色とともに着用者の人物像を反映しているように見える。

<「鼠縮緬地雁行模様着物」法量>

丈: 147.5cm

衿: 60.8cm

※襲の法量は、着物に準じる。

娘の穂積歌子の回想録『ははその落ち葉』には、千代子の人柄が伺える記述が書かれている。例えば、同書巻の二では、千代子は、買入れた物の代金の支払いがまだ済まず借りている形になっていることが大嫌いで、商人が集金に来ないと請求書の催促をし、ある時はお金をまとめて、書置きを置いて店に置きに行くこともあったという。また、千代子が子どもの時を回想した記述では、夏祭りのときにいつも着ている着物より良いものを着て出かけたが、借金をしている家の前を通りがかった時に、自分の家がこの家に借金をしていることを思い出し、あの家は娘には良い着物を着せておきながら借金を返済しないでいる、と思われたら両親に迷惑がかかると思いとても恥ずかしくなった<sup>9</sup>、と語っている。幼少のころから儉約に努め、家族のことを大事にしていた様子が伺える。そうした性格は、衣服や身だしなみにも表れていたようで、娘の歌子にも自身の信条を伝えていたことがわかる記述がある。



図5「鼠縮緬地山水風景雀模様着物」



図6「鼠縮緬地雁行模様着物」



図7「鼠縮緬地雁行模様襲」

「櫛笄などの髪飾りについておっしゃるには、「大切にすれば、常に用ひても左程損じるものでもないから、身分相応奢りに過ぎない限りむしろ上等の品を選ぶがよい。安っぽい品は倦き易くて、ちぎ外の品がほしくなるものだ。ろくでもない物を沢山持つてゐて度々取りかへるのはよくない」と云はれ、のちの三四年は常の一つ櫛笄ばかりを用ひて居られた。(中略)衣裳の色や柄は、はつきりしたのがよいと云はれて、其頃粋とか云つて見分けられぬ細かい縞を人々が珍重したが、そんなのは着られず、衣服の色は地味なのを着ながら、襦袢の裏衿や裾などに赤いのをつけるのは、未練に若々しくみられたがるやうで厭味だと云はれて、帯上げしごき紐の類も白茶か水色許り用ひられ、小袖の紅絹裏の外は赤いものは決して用ひられなかつた。着物の色は、薄ねづみ、鶯茶、鳩羽色などのをとなしげなのを好まれた。模様には深く意匠をこらして美術的なをいろいろ考へ出し、誂へて染めさせられたが、餘り物好き過ぎて異様なのは嫌はれた。』『ははその落ち葉』110-111 p

この文章から、千代子は、流行に左右されず良いものを長く大切に使うことを信条とし、それでいて第三者から見られた時のことも考えて着物の色や模様を選んでいたことが伺える。当館所蔵の千代子所用の着物も、刺繍などの装飾や華美な模様や色を施すことなく、鼠色や栗色といった落ち着いた色調の地色に、シンプルな模様が表されていることから、千代子の趣味を伺い知ることができる。また、歌子の伝承の通り、良いものを長く使いたかったのか、3点の着物にはところどころ裏地を補修したような跡もある。

以上のことから、渋谷千代子所要の着物3点は、千代子が渋谷栄一夫人として、本格的に栄一と暮らすようになった明治時代初期から晩年までに着用された着物であると考えられる。

## 6. まとめ

渋谷栄一の柔軟な思考は、和服仕立ての毛皮付きの外套として、他に類を見ない衣服となって表れ、千代子の堅実で質素なひととなりとは、着物の模様や地色となって表れている。衣服は、着用する人物の人となりを反映し、その人物像を伺い知れるものであるといえるだろう。

ただし、千代子は、自身の身の回りのことは儉約的であった一方で、夫の栄一の身だしなみに対しては気配りを怠らなかつた。歌子の回想では「なめし革かと思ふほど地厚な織色の御羽織やら、皮の御帽子やら、当時の紳士向のりゆうとした品を取り揃えて上げられ、古渡り更紗や縫ひつぶしの御紙入れ、其他の持ち物は名代の袋物屋宮川で作らせられたのであつた。」<sup>10</sup>とあるように、衣類から小物まで、千代が目利きをしたものを取りそろえていた。渋谷が数々の大きな事業を成し遂げ、成功者としての風格を保てたのには、千代子の内助の功があったからともいえる。

以上のことから、当館で所蔵する渋谷栄一夫妻に関する服飾資料は、明治時代初期に着用されていた衣服の諸相を鮮明にするものであり、服飾資料であるとともに歴史資料として渋谷栄一および千代子の人物像をより鮮明にするものであると言える。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり当館館長の長崎巖教授に、ご助言ご指導いただきました。末筆ではございますが、ここに記して御礼申し上げます。

註)

- 1 1830~1901。富岡製糸場の初代場長や第一国立銀行仙台局の支局長を務めた。
- 2 尾高長七郎が二人を追って京都へ向かう道中に殺人事件を起こして捕縛された際に、渋沢栄一が書いた幕府を批判する内容が書かれた手紙を所持していたことから栄一に嫌疑がかかる。一橋家家臣になることで捕まることを免れられるのではないかと平岡に提案されたことにより、やむを得ない形で仕官した。
- 3 「共立女子職業学校 / 明治十九年十二月 是ヨリ先宮川保全等当校ヲ創立ス。是月栄一、其趣旨ニ賛シ、出資シテ之ヲ援ク。(中略) 青淵先生女子教育ノ為メ尽ス所少ナカラス ○中略(原文ママ) 明治十九年共立女子職業学校創立ノ際ニハ資ヲ出シテ補助ス」『渋沢栄一伝記資料 第26巻』渋沢栄一伝記資料刊行会、昭和34年、922p。
- 4 「宮川保全が幕臣の子供で、徳川慶喜の移封に伴って開校された沼津兵学校に在籍していたという経歴があったこと、もう一つは創立発起人に矢野次郎が加わっていたことだろう。矢野次郎は、これまた旧幕臣で、東京商業学校の前身である商法講習所の所長をつとめていた関係から、渋沢と親しく、この関係で、渋沢に財政的援助を願い出たものと推測される。」鹿島茂『渋沢栄一 下 論語篇』文芸春秋、2013年、229p。
- 5 バリからの帰国後も何度か問いただそうとしたが、明治14年(1887)に華族令が公布され徳川家をはじめとする大名たちの名誉回復が進むまで、長らく慶喜本人の口から語られることはなかった。
- 6 デジタル大辞泉【インバネス】<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001001334000>
- 7 『風俗画報』第108号、明治29年2月、20p
- 8 <https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/>
- 9 『ははその落ち葉』54p
- 10 前掲書 98p

< 参考文献 >

『渋沢栄一 上 算盤篇』、『渋沢栄一 下 論語篇』鹿島茂、文芸春秋、2013年  
『渋沢栄一伝記資料 第26巻』渋沢栄一伝記資料刊行会、昭和34年  
『ははその落ち葉』穂積歌子、国立国会図書館デジタルアーカイブ  
公益財団法人渋沢記念財団データベース

# Clothing Materials of Shibusawa Eiichi and his Wife, Chiyoko, - Clothing as Historical Materials

Kawai Yukako

[Abstract]

Kyoritsu Women's University Museum has a fur cloak belonging to Shibusawa Eiichi and two kimonos belonging to Chiyoko. In addition to examining the date and use of these garments, this paper discusses the concept of clothing of Mr. and Mrs. Eiichi Shibusawa based on the historical documents and the artworks in the museum's collection. The fur cloak was made and worn during the early Meiji period, when the wearing of fur clothing was permitted, and is thought to be a garment that incorporated Shibusawa's flexible thinking due to its haori-like tailoring. As for Chiyoko's kimono, it was worn in the 1870s, before her illness and death, and it reflects her solid character, as it is typical of the rat-red hem patterned kimono that was popular in the early and mid-Meiji period. These materials are not only valuable as works of art, but are also considered to be historical materials that provide a clearer portrait of the modern historical figures.

# A Study on the Characteristics of Themes of the Western Chintz with a Figure as a Motif: Using the Western Chintz in the Collection of Kyoritsu Women's University Museum

Koike Kanae

[Abstract]

Kyoritsu Women's University Museum has 51 western chintz, 25 of which contain a figure as a motif. In this paper, we examine the details of four items (IDs: 2427, 2136, 2151, and 2206) that were under investigation from 25 western chintz. This study investigates object details using database of The Art Institute of Chicago, The Philadelphia Museum of Art, The Metropolitan Museum of Art, and the Victoria and Albert Museum. Moreover, this paper describes the characteristics of western chintz with a figure as a motif including 25 western chintz in the Kyoritsu Women's University Museum.

It became clear that most of them can be divided into the following three groups: those with landscape themes, those with themes from works of art, and those with political themes. In this paper, we especially examine those with themes from works of art and those with political themes. About those with themes from works of art, some were affected by literature and drama that had just come out at the time, while others were influenced by neoclassicism. It seems that this phenomena is associated with excavation of Pompeii. About those with a political subject, they have changed how the politicians are depicted before and after French Revolution.

According to these results, it was concluded that there were cases where the themes of western chintz reflected interest and symbolic events of the times.